広島からアッシジへ

平和への祈りと対話 — 2026 年 国際平和会議参加報告

田中稔子 活動報告　｜　編集・執筆：田代礼子



国際平和会議の会場にて（2026 年 10 月 24 日）

日頃より田中稔子の平和活動を支え、励ましてくださっている皆様に、心より御礼申し上げます。2026 年 10 月 25 日から 27 日まで、イタリア・アッシジで開かれた国際平和会議「Unarmed and Disarming Peace」に、昨年に続き招待を受け、母娘で参加しました。

本報告では、母が世界に届けた被爆体験と核兵器廃絶への願い、参加者からの反響、宗教を超えた平和への祈り、そして活動を支える人々との出会いをお伝えします。

1　アッシジに集う、平和を願う人々

1986 年、教皇ヨハネ・パウロ 2 世の呼びかけで、世界の宗教指導者たちがアッシジに集まり、それぞれの信仰に従って平和を祈りました。それから 40 年。サンテジディオ共同体が受け継いできた「アッシジの精神」のもと、国際平和会議がこの地で開かれました。

10 月 25 日の開会式には、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、仏教などの宗教指導者をはじめ、研究者、平和活動家、市民社会の代表者が参加しました。立場や信仰の違いを認めながら互いの声に耳を傾けること自体が、会議の大切な意味を示していました。



10 月 25 日の開会式。さまざまな宗教・立場の人々が集った。

開会式で印象に残ったのは、宗教を人々の分断の道具にしてはならないこと、そして対話を絶やしてはならないという訴えでした。世界各地で戦争や対立が続く今だからこそ、違いを超えて対話を続けることの大切さを感じました。

2　広島の被爆体験を世界へ

10 月 26 日、母・田中稔子は核兵器の軍縮と拡散をテーマとするフォーラムに登壇しました。各地から集まった登壇者や参加者とともに、核兵器廃絶と平和への道について考える機会となりました。



フォーラムで英語による被爆証言を行う田中稔子。

母は 81 年前の広島での体験を語り、1981 年に広島を訪れた教皇ヨハネ・パウロ 2 世の言葉に触れました。原爆は神のしわざではなく、人間のしわざである。人間が生み出した核兵器であるなら、人間の手で廃絶しなければならない。そして、人類が共存できる未来への希望を次の世代に託したい――それが母の訴えでした。

広島と長崎の被爆体験を、今を生きる世界の人々に伝え続けることの大切さを改めて感じました。



長崎の中村倫明大司教がアッシジに持参された「被爆マリア像」。
1945 年 8 月 9 日の原爆投下によって破壊された浦上天主堂に残された
聖母マリア像の頭部で、核兵器の非人道性を今に伝えるとともに、
平和と和解への祈りを象徴している。

3　証言が生んだ反響と連帯

フォーラムは満席となり、終了後には多くの参加者が母のもとを訪れ、感銘を受けたことを伝えてくださいました。核兵器をはじめとする大量破壊兵器の非人道性を後世に伝える重要なメッセージとして、母の証言が受け止められたことを実感しました。



フォーラムの登壇者たちが手をつなぐ。

被爆者の高齢化が進む今、本人が直接語る機会はますます貴重になっています。被害の数字だけでは伝わらない一人ひとりの経験に耳を傾けることが、国や宗教、世代を超えた理解と連帯につながります。



フォーラム後、母を囲んで交流する参加者たち。

4　「聖なるものは平和だけ」

10 月 27 日、聖フランチェスコ大聖堂前で行われた閉会式では、世界各地から集まった宗教指導者と大勢の参加者が平和への祈りを捧げました。教皇レオ 14 世からはビデオメッセージが寄せられました。

教皇は、宗教の名によって戦争を正当化することを否定し、聖なるものは平和であると訴えました。

その呼びかけは、信仰を人々の分断や暴力のために利用してはならないという、強いメッセージとして心に残りました。

また、祈りは弱く見えるかもしれないが、平和を求める人々の力となることが示されました。

（教皇メッセージの内容は要旨。直接引用ではありません。）



会場スクリーンに映る教皇レオ 14 世



「PEACE」を掲げる参加者たち



異なる宗教の指導者たちが一堂に会し、
平和への祈りを共にした。



聖フランシスコ大聖堂前に集った人々。
宗教や文化の違いを超え、平和を願う祈りが
アッシジに響いた。

異なる信仰を持つ人々が互いの違いを認め、ともに祈る姿に、世界の平和を願う声が一つになっていることを強く感じました。

5　人々に支えられ、平和への願いをつなぐ

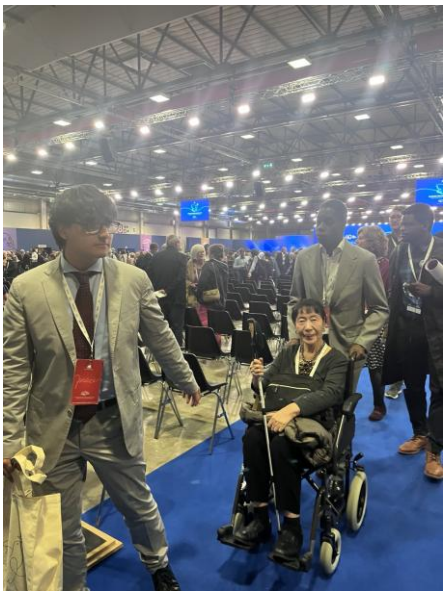
会議を支えていたのは、サンテジディオ共同体の多くのボランティアでした。車椅子で参加する母にも、移動や会場での案内など、温かい心遣いをいただきました。長年活動に携わるベルギーの教育者カレルさんとの対話からも、若者が実践を通して平和を築く活動の大切さを学びました。



会議参加を支えてくださった人々



若い世代との交流



多くの方々の温かな支援により、
車椅子での会議参加が実現した。



平和への願いを次世代へ。
アッシジでの会議を終えて、母娘で。

10 月 26 日夜にはアッシジ市長主催の晩餐会も開かれ、歴史ある会場で伝統音楽を聴きながら、各地からの参加者が交流しました。

宗教の名の下に対立や分断が深まる今日、為政者は、世界の人々の平和を願う声と祈りを見限ってはならないと思います。宗教の名を借りて戦争を正当化することは、信仰への裏切りではないでしょうか。祈りや対話は弱く見えるかもしれません。しかし、人々が連帯するとき、世界を変える力になり得ます。そのことを体現するアッシジで、ヒバクシャである母の声を、娘として支えながら世界に届けられたことを嬉しく思います。小さな貢献であっても、その声を次の世代へつないでいきたいと願っています。母の活動を支えてくださる皆様に、心から感謝申し上げます。

2026 年 10 月　田代礼子